

## ジャニ・ベグ(キプチャク汗国)の貨幣二種

中村雅之

### 1. キプチャク汗国の貨幣

13~14世紀に栄えたキプチャク汗国は、いわゆる「タタールの軛」としてルーシ諸公国に影響力を持っていたことで知られるが、そこで発行された貨幣はさほど多くは知られていない。イル・ハン朝の貨幣は二つの立派なコレクションがウェブ上に公開されているため、およそ500枚もの貨幣の画像によって、ほぼ全貌をうかがうことが可能であり、チャガタイ汗国のコインも十分とは言えないものの、ウェブ上で約70点の画像に接することができる。しかし、キプチャク汗国の貨幣はMitchiner(1977)に、とても見やすいとは言えない130点ほどの写真が収められている以外は、ウェブ上のいくつかのサイトに重複を含めて延べ50点足らずの画像を得るにとどまる。本稿では、古代文字資料館の管理する二種のキプチャク汗国の貨幣を紹介する。いずれもジャニ・ベグ汗(在位1341-1356頃)の発行した貨幣である。

### 2. ジャニ・ベグの二言語貨幣(図1、図2を参照)

二言語貨幣はキプチャク汗国の貨幣としては非常に珍しい。ハーン(汗)の名前のみがウイグル文字モンゴル語で、他の部分は全てアラビア文字アラビア語である。Mitchiner(1977)にはジャニ・ベグの貨幣が10点収められているが、二言語貨幣は含まれていない。ウェブ上では唯一ロシアのサイト「Mongolian Golden Horde coins (<http://klad.hobby.ru/english.htm>のfindsから入る)」に本貨幣と同種のものがある。小さい画像の脇に「Jani Beg Khan. AR Dirham. AH743/AD1342-1343. Saray al-Jadid mint.」というわずかな情報が添えられるのみであるが、幾分かは銘文を読む助けになる。以下、説明の便宜上、このサイトに示された貨幣をタイプBとし、本稿の解説対照である古代文字資料館の管理になるものをタイプAとする。

タイプAとタイプBは、銘文は同内容であるが、一見して気づく二つの相違点がある。第一は書体である。タイプAが線の太いゴツゴツした書体であるのに対して、タイプBは線の細い流れるような書体である。第二は銘文の枠の違いである。裏面の銘文の枠が、タイプAは四重であるが、タイプBは三重である。すなわち、両者とも、一番外側に数珠模様の枠があり、その内側に太い円の枠、さらにその内側に太い四角で上下左右にコブの付いた枠があるが、タイプAではさらにその内側に細い四角(コブ付き)の枠がある。

また、表のウイグル文字部分に注目すべき相違が確認できる。それはタイプAは「Jani Beg -n」とあり(右写真)、タイプBには「Jani Beg qan」とあることである。つまり、タイプAでは「qan」の「qa」の部分がない。これは潰れて見えないということではなく、初めから記されていないのである。この部分がタイプBのように「ジャニ・ベグ・ハーン」と記されるべきものであるならば、タイプAの表記は明らかに疎漏ということになる。これをどのように考えるべきであろうか。

第一の可能性として、(タイプAの)本貨幣が贋作であるということが考え



られる。もしもタイプAの特徴を有し、かつ「Jani Beg qan」と記された貨幣が発見されるようなことがあれば、ほぼ自動的に本貨幣は贋作と判断されるであろうし、そうでなくても古い時代の模造貨幣である可能性はある。しかし、タイプBも含め、ジャニ・ベグの二言語貨幣はほとんど市場に出回っていないので、近年の贋作という可能性は低い。ミチナーの図録にも収められていないような珍しい貨幣の贋作が、手間をかけて作られながらもほとんど存在を知られていないというのは、それほどあり得べきこととは思われない。加えて、本貨幣は小型のコインとしてはかなり精緻な作りであって、同時期の他の貨幣を模したいわば小遣い稼ぎ(?)の偽造品とは一線を画する。

第二の可能性は、一種の省略体であるというものである。同時期のイル・ハン朝の貨幣ではウイグル文字「qan」の「a」がしばしば記されない。特に小型の貨幣においてその傾向は顕著である。しかし本貨幣のように「q」の部分まで省略された例はなく、「-n」を「qan」の省略体と見るにはやや勇気がいる。ただし、アラビア文字においても、「al-sultān (スルターン)」のようにこなれた語では「s」が全く記されない例が頻繁にあるから、可能性として心に留めておく必要はあるかも知れない。

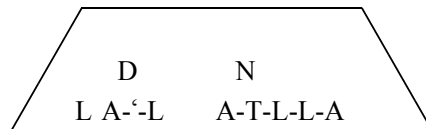
第3として、真に単なる疎漏である可能性がある。いつの時代の貨幣にも種々の疎漏があり得るが、ウイグル文字が(おそらくは宮廷においてさえ)日常的には使用されていなかった14世紀のヴォルガ川流域にあっては、このような疎漏が十分にあり得たと考えられる。

要するに、本貨幣でなぜ「-n」とあるのかについては、明確な結論を出すことはできない。類似資料の出現を待ちたい。

なお、「Jani」の「J」は文字としては{C}で記されている。これはこの時期のウイグル文字モンゴル語に共通する特徴である。

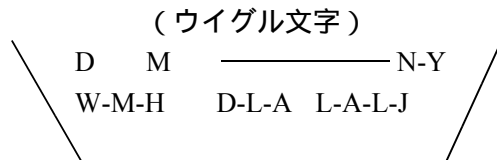
### 3. 二言語貨幣のアラビア語銘文

表面の上段には、「al-sultān al-ʿādil」(公正なるスルターン)とある。アラビア文字は以下に示すような配置になっている。



右側の語では、二つの{L}の間に{S}があるはずであるが、省略されている。左の語では、定冠詞{A-L}の{A(アリフ)}が見えない。ただし{T}の上に二本の縦線が見えるので、あるいはその1本が{A}であるかも知れない。

中央にウイグル文字を挟んで、下段のアラビア文字は以下のような配置になっている。



いささか複雑な配置であるが、「Jalāl al-Dīn Mahmūd」と読む。これはジャニ・ベグの名前の一部(ないしイスラム名)であろう。「al-Dīn」の「īn」が「Jalāl」の前に位置してお

り、かつそこから「Jalāl al-D」を貫く横線が左に伸びている。タイプBでは最下段にいくつかの文字が見えるが、本貨幣ではよく見えない。

裏面には上段・中段・下段に「duriba al-Sarāy / al-Jadīdah fī / sinīna 743」とある。「duriba」は「打たれた」、すなわち「(貨幣が)打刻された」の意。「al-Sarāy al-Jadīdah」は「新しいサライ」を意味する地名でキプチャク汗国の首都である。「fī」は英語の「in」にあたる前置詞。「sinīna」は「年」を意味する名詞の属格。前置詞は属格を要求する。最後はアラビア数字(ないしペルシャ数字)の「743」。「4」は字形がはっきりしないが、他の数字には見えないため、消去法で「4」と判断される。タイプBの「4」も画像が不明瞭で正確な字形が確認できない。なお、イスラム暦の743年は西暦の1342年頃に相当する。

以上により、裏面の銘文は「743年に新サライで打たれた」と読むことができる。文字の配列は、上段が以下のようなものである以外は順番に読んでよい。



A Y L-A B
R-S- R-D

#### 4. ジャニ・ベグのアラビア語貨幣(図3、図4を参照)

本貨幣はあまり状態が良くない。しかし同種の貨幣は比較的によく出回っているので、それらの画像を参考にすれば、おおむねの内容は推察できる。

表面の上段は「al-sultān al-‘ādil」(公正なるスルターン)とあり、文字の配列は上述の二言語貨幣におけるものと同じである。本貨幣では「‘ādil」の部分がほとんど見えない。下段には「Jānī Bak khān」(ジャーニー・バク [= ジャニ・ベグ]・ハーン)とあるはずだが、これも「Bak khān」は一部分しか見えない。

裏面は、上段と下段に「duriba Sarāy / al-Jadīdah」(新サライで打たれた)とある。ただし本貨幣では「Sarāy」の部分は明瞭ではない。ウェブ上で同種の貨幣の画像を見る限り、二言語貨幣の場合と異なり、「Sarāy」には定冠詞「al」が付いていないようである。

最下段に数字の「7」(Vの字形)が見えるが、これが発行年の一部であるかどうかは未詳。

(参考文献)

Mitchiner, Michael (1977), *The World of Islam*, Hawkins Publications.

ジャニ・ベグの二言語貨幣



図1 (表)



図2 (裏)

ジャニ・ベグのアラビア語貨幣



図3 (表)

(文字を見やすくするために傾けて撮影)



図4 (裏)